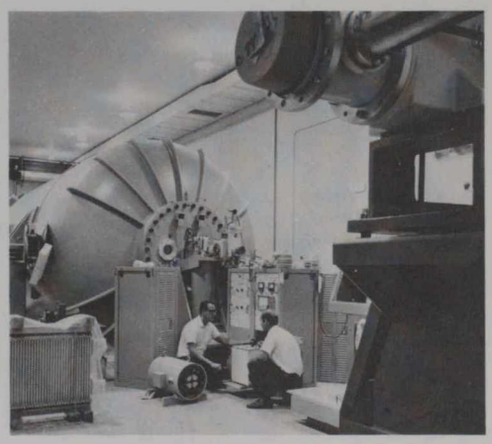
ゆる管理組織や委員会のメンバーに組みこまれている。教授陣の指導能力の評価には学生の一般投票が使われるし、多くのケースにおいて、学部人事の採用、昇進には学生の意向がとり入れられている。

歴史の古い大学の多くは私立の教育機関としてスタートしたものだが、ごく最近のものは州政府によって創設されている。しかし実際には両者の間には、大した違いはない。一方で政府は各州立大学には自主管理を認可し、他方今日の私立大学が公共の資金に依存する程度は公立と同じくらいにまでなっている。第二次大戦前の大学は、主として授業料と個人資金の寄付に頼っていた。が、戦後の規模拡大と高等教育に要する費用の急激な上昇は、学生の負担や、法人および校友の援助能力をはるかにこえてしまった。その結果、政府が徐々に高等教育に関する財政上の肩がわりを引き受けることになったのである。今日では経費の八〇パーセント以上――大学によっては九〇パーセントをこえる――を州政府および連邦政府が負担している。

こうして、大学教育に要する費用はぐっと安くなった。何学部とかぎらず、学部学生の年間授業料は八百～九百五十ドル（約十五万円）、大学院では約千ドル（約十七万円）で、医学部でさえ千二百～千五百ドル（約二十三万円）ですむ。ということは、カナダの学生は教育費のほんの一部分を負担するだけでいいということになる。州によっては、外国からの留学生に対してはカナダ人学生の倍額を要求するところもあるが、それでもその程度の額では実際の経費に遠く及ばないのである。



(5)

低い授業料と試験による公平な採用によって、大学教育はすべての能力ある者に対してその門を開くべきである。しかし残念ながら、まだ家が貧しく、高校を出ると生活をささえなければならないために大学へ行く余裕のない学生が存在する。行く気のない者、またその力のない者もいる。しかし仕事を持ちながら夜間の講義に出席する者もいる。多くの者は大学に進むが、パート・タイムの仕事を持っているので所定の単位を減らさねばならない。

例えば高校を出て店か工場で働く場合、一週間に三ないし四日間、大学に夜間かよって五～六年で学士号を取得し、教師か計理士になるということになる。また一日八時間タクシーの運転手をやるとなると、二科目か三科目分ぐらいしか時間が残っていないことになる。ふつうのフルタイムの学生たちもパート・タイムの仕事を持つ者が多い。夜や週末にタクシーを運転したり、レストランで働いたりするのである。

夏休みには大半の学生が働く。もともと、学生が働けるように、特に父親の農作業を手伝えるように、というのが四か月間の休暇が設けられた一つの理由である。運のいい者はサマーキャンプで愉快な仕事を見つけるだろう。北方の森林や鉱山へ行く者もある。賃金はいいが、重労働だ。しかし多くの学生たちは、働かなければ大学へもどってくる金が足りない。親の仕送りの不足分を夏休みにかせぎ出そうという者もいる。また卒業後の自分の本職に役立つような経験のために働く者もいる。

カナダではほとんどの大学の学年は九月から四月までである。これが秋学期と冬学期に分けられる。多くの場合これに春学期が加えられており、これはふつう夜間コースである。さらにすべての大学が夏の間六週間にわたる昼間および夜間の講座を開いている。夏期講習には主として上級資格を取得しようとする教師たちが出席する。しかし今ではもっと広く、一般の学生や退職者、外国人学生、語学好きの学生などにも活用されるようになった。ビジネスマンの再教育や管理職むけの経営コースなどさえ設けられている。

大ていのカナダ学生にとって、大学教育は就職への第一歩である。はじめから彼らは自分が心に決めた最終目標――教師、技術者、ジャーナリスト、研究者、法律家、医者など――にあわせて科目を選択する。雇用者側も学生に対して、あまり世話をやかなくてもすぐ仕事に入っていけるくらいのちゃんとした知識を身につけて卒業してくるものと期待している。学士および修士の学生の八五パーセントは自分の専門分野に就職する。むろん美術のような分野ではこの数字は低く、商業金融関係ではずっと高い。大卒の給料はかなり高い。新卒の学士は、コミュ

私のカナダ留学

飯塚 恭子

七九年八月三十一日に日本をたち、こちらカナダのビクトリアにやってまいりました。最初の日は、とにかく住む所が決まっていなかったので、大学のハウジング・サービスに行きました。日本からきたこと、親類がいないことなどを、かたことの英語で言ったのがよかったのか、日本出発まではことわられた寮に入ることができました。寮が開くまでの三日間も、ダウンタウンの近くのアパートに住むことにアレンジしてくれました。次の日は、午前中英語のテストを受けました。最初の一週間が単位の登録期間。体育館